第44回講演録

マレーシア経済と日本企業の貢献

臼　井　誠　一

プロフィール

横浜市立大学商学部卒業後、1971年、日本航空㈱に入社。国内外での勤務を経て、1990年、Jupiter Air Ltd.（在香港、日本航空と現地代理店の合弁会社）CEOに就任。1999年、日本航空マレーシア・ブルネイ支店長などを務めた後、2007年、日本航空を定年退職。同年、任意団体・日本マレーシア倶楽部（東京）を設立し副理事長となり、今日に至る。

冒頭で経済研究所所長より、講演者である日本マレーシア倶楽部副理事長の臼井誠一氏の紹介がなされた。

臼井：ご紹介がありました臼井と申します。私は1948年に、京都府の北部にございます舞鶴という「岸壁の母」で有名な、太平洋戦争後の引き揚げの港湾として有名な所で生まれました。その後ニューヨークに７年、香港に５年、50代になりましてからはマレーシアに４年と少しです。

2007年に、私どもマレーシア駐在経験者やマレーシア大好き人間が、マレーシア人との交流親善・留学生支援を目的とした任意団体を始めました。現在、85名ほどの会員で懇親会や留学生を囲む会、留学生支援の文化活動、さらには、駐在経験者の人材派遣なども企画しています。

１．マレーシアの地理

まず、マレーシアの地理についてお話しします。この地図（図１）の北西がインドシナ半島です。東にフィリピン、南にインドネシアがあります。インドシナ半島の先にマレー半島があって、中央にタイがあります。マレー半島の突端までがマレーシアで、その先にある小さな島はシンガポールです。その南がスマトラ島で、インドネシアの領土です。その東にボルネオ島があり、島の北側が東マレーシアになっています。東マレーシアの

図１　マレーシアとその周辺地域

中にじつはブルネイという、石油とガスの産出国があります。この国民の１人頭のGNI（国民総所得）はものすごく高いです。東マレーシアの北東の突端には4,101メートルのキナバル山という高い山があり、大きな山脈もあります。

赤道近くですので、一年通して大体平均気温は31～32度です。朝方でも27～28度、昼になっても32度ぐらいです。雨季・乾季がありまして、雨季は大体午前中２回、午後２回ぐらい、スコールといいますが、雨が降ります。乾季はこれが１～２回か３回ぐらいになるという違いだけです。７～８月になりますと日本から来られる方は、涼しいと思われるでしょう。日本はもう大体６月ぐらいから32～33度になって、しかも湿度が高いからです。シンガポールやマレーシアでは、一年間気温がほとんど変りませんので、非常に住みやすい国と言えます。

２．マレーシアの人口と民族

マレーシアは日本の面積の90％ぐらいしかありません。人口は今（2014年時点）は約2,900万人です。マレーシアでは出生率と死亡率の関係で言いますと、１年間に約55万人ずつ人口が増加しております。ですので、私がおりました1999年の頃から15年経っていますので、大体800万人ぐらい増えているという状況です。

その中で、マレー半島のほうに70％ぐらいの人がいまして、東マレーシアのほうに残りの30％が住んでいます。民族的には、純マレー人が大体62％で、中国系の人が24～25％ぐらい、インド系が９％ということです。

そのほかにじつは、原住民という言い方はおかしいですけども、ずっと昔から住んでいるという民族が、大体大きく言って30ぐらい、細かく分けると47ほどいます。オランウータンっていう動物がいますね。「オラン」は「人」という意味です。ウータンっていうのは森。だから森に住んでいる人っていう意味で、オランウータンと呼ぶ。そして、原住民のことを「オランアスリ」と言います。「アスリ」は、「元々、先住」などを意味します。

言葉はマレー語と中国語と南インドのタミール語です。中国語も広東語や福建語などの方がおられますけども、広東語のほうが多いようです。中国系の人たちとインド系の人たちの多くは、主にイギリスの植民地時代に、最初は労働者としてやってきた人たちの子孫です。長くイギリスの植民地だったので、英語も使われています。

３．マレーシアの歴史

マレーシアは16世紀はじめにポルトガルに占領されました。先ほど申しましたけど、ちょうどマレー半島とスマトラの間にマラッカというところがありますが、ここのマラッカ海峡を通って中東からのタンカーが日本にやって来ます。海賊が多い海峡ということでも、非常に問題になっております。その海峡に面したマラッカという町が、15世紀、16世紀に、東南ア

ジアにおける香辛料貿易で非常に栄えました。ここをめぐってポルトガルがマラッカを占領し、やがてオランダが取って代わります。

後にはイギリスが占領したのですが、そこをどういうふうに変えたかといいますと、一つは錫です。貿易品とするために、鉱物の錫を開発したのですが、錫鉱山の開発に、中国から労働者を連れて来たわけです。それからインド南部のタミール地方からも同じように労働者を連れて来て、もう一つの輸出品であるゴムを生産するために、ジャングルを切り開いて農園を作りました。彼らは、港湾の労働力としても使われました。この結果、今のマレーシアの中でインド系とか中国系の人の数が多いということなったわけです。

ですから日本と違って、後から来た人がそこでどんどん増えていって、大きな役割を果たすようになって行きました。マレーシアという、多民族の国家は、このような歴史から作られたわけです。

次に、1942年に日本が太平洋戦争でマレーシアを占領しましたが、当時ここはイギリスがシンガポールと東マレーシアを含め植民地としていました。1945年に太平洋戦争が終わりましたときに、いったんイギリス植民地に戻ります。ところが1948年に、中国の影響を受けたマラヤ共産党が、独立の武装蜂起をしましたが、イギリスに鎮圧されてしまいました。

そのような経緯を経てマレーシアは、マレー半島を中心にして、1957年に初代のラーマン首相のもと、マラヤ連邦として独立を果たします。ところが東マレーシアとシンガポールはまだ自治州として、イギリス連邦の植民地として直轄になったまま残っていました。1963年、シンガポールと今の東マレーシアがマラヤ連邦に統合され、マレーシア連邦となります。

ところがこのときに大きな問題が起ります。というのは、シンガポールは中国系が圧倒的に多かったために、シンガポールを除くと、中国系の選挙人の数が確か数パーセントぐらいでしたが、シンガポールを入れると中国系が多くなりかねないという状況でした。それとシンガポールの当時GDP（国内総生産）が500ドル程度であったのに対し、シンガポールを除く地域では220ドルという状態でした。つまり、マレー系にしてみれば、選挙で中国系が第一党になりかねず、中国系のシンガポールにしてみれば、

GDPの低い地域のための財政負担が大きいという事情があったわけです。

また、シンガポールで政権を握っていたのは人民行動党でしたが、じつはその中にも派閥がありました。一つはイギリスで教育を受けた、後に独立シンガポールの初代首相になるリー・クワンユーさんとか、そういう英語を得意とする人たちです。もう一つは、いやいや、植民地にされていたイギリスからは独立したんだから、もっと中国語をしゃべろうという人たちです。じつは1958年頃には、中国共産党シンパでもある後者のほうが、45パーセントぐらいになっていました。

また、人民行動党は、中国系のマレー人が発展していくためには、外資を使って近代化を図らなきゃいけないということを主張していました。これに対して、ラーマン首相を中心とするマレー系の人たちは、「本来はこの国はマレー人の国なんだ。あなたたちは移民として来たんだから、もうちょっと遠慮してくれ」というのが本心でした。

そうして、ついに1964年にシンガポールで暴動が起きてしまいます。マレー系と中国系が激突して、36人の死傷者が出ました。それを踏まえてラーマン首相がシンガポールをマレーシア連邦から追放、離脱させるという宣言を行いました。

４．シンガポールの建国

シンガポールという国はマレー半島の突端にある島国で、水は自給できないため、大きな橋の所にある大きな水道管で、マレー半島から輸入しています。マレー半島にも中国系の人たちが多くいることもあり、マレーシアとは切るに切れない関係にあります。水道の供給の条約は2060年まであります。

シンガポールは分離後、同時に左派系を切り捨て、いわゆる人民行動党の一党独裁になりました。どういうふうにやったかといいますと、完全な能力主義、もっと具体的に言いますと、イギリスやアメリカへ留学した、英語がしゃべれる、近代的な経営手法を学んだ人間が首相になり、すべての官庁、大蔵大臣から行政相にいたるまで、トップは全部30代の若手がや

りました。極端に言うと、国家資本主義とでもいうような手法ですね。つまり日本でいったら、経済産業大臣が、その政府の持株会社の社長を兼務しているようなものです。

だからシンガポールでは、政府が決めたことは即、政府公社と株式会社が全部やるわけです。効率は確かにいいです。しかし、中国系でない、インド系やマレー系の人たちは、おこぼれで暮らすしかないという状況です。徹底して近代化、近代化、近代化で来ていますから、今シンガポールへ行かれますと、クジラ型をしたすごい超高層のビルが建っており、その上にプールがあったりして、驚かれると思います。しかし、相変わらず欧米の大学を出て、そして政府の役人になって、30代、40代で活躍して、40代後半から人民行動党の議員になり、それで大臣とかを目指すという人たちが動かしています。

確かにシンガポールは中国系の中では珍しい国です。リー・クワンユーさんがはっきりこう言っています。中国人が一番だらしなく汚く暮らしている象徴が香港だと。しかし中国人がその気になれば、世界に冠たるすばらしい国を作ることができる。その見本がシンガポールなんだと。

シンガポールに行きますと、例えばガムは禁止です。それからいろんな所にポリスがいます。私は正直言ってシンガポールが好きとは言えません。シンガポールにおられた方には申し訳ないですけど。つまりそこまでやりますかっていうぐらい厳しい所です。

５．マレーシアのルック・イースト政策

一方、マレーシアはどうしたかというと、４民族が融和をしながら、それで近代化を図ろうというかたちで始まっていく。1981年にマハティールさんが首相に就任しました。この方もともとお医者さんなんですが、まさに公務医ですね、国のドクターとして、その近代化を図ろうということで。

そのときの柱に持って来たのが、「ルック・イースト政策」です。LEPと呼んでおりますけれども、日本・韓国の小資源国が短期間に近代化を成し遂げたのを見習おうということです。とくに日本を彼は非常に勉強して

います。例えばまず日本がなぜ治安がいいかというのと、中産階級社会であんまり格差がない。だから穏やかに暮らしていると言っているんですね。もう一つは中小企業の厚みがすごいということです。じつは日本の高度経済成長を支えているのは、とくに技術系の労働者なんですね。つまり科学技術の理論とかやり方とか、実際に作ることをやっているのは、日本の場合、工業専門学校から出た人たちです。

それをマハティールさんは日本へ来るたびに学びました。東京都大田区だとか、埼玉県とか、川口の鋳物工場とか、広島とか、大阪の河内とか。つまり中小企業の層が厚くて、しかも一人一人の職人さんとか社員とか、そういう人たちのモラルが非常に高い。つまり一人一人が工夫をしているということで、この日本のやり方をなんとか根付かせることができないだろうかと、彼は非常にたくさんの留学生を日本に送りました。

それから目標として、「ビジョン2020」、つまり2020年までに先進国に入りたいと彼は言いました。それで実際に１つめの目標として、１人あたりGDPが１万ドルを超えることをあげ、2012年にこれを達成いたしました。これを短期間に達成したことはすごいことだと思います。一方、シンガポールは５万ドルを超えており、いまでは、日本よりもはるかに高くなっています。

それから「マルチメディア・スーパー・コリドー」といいまして、じつは通信網として完全に全世界に通じるようなネットワーク網を作ることを目標にしています。これは日本のNTTをはじめとして、日系の企業がたくさん入っていますけども、そういうことを次から次へと打ち出しました。

ところが、先々代の首相のときに「ブミプトラ政策」というのを取り入れたことが問題を引き起こします。それは、経済的に見ますと、あまりにも中国系とインド系が優位に立っているので、土地っ子とか、地元っ子という意味のブミプトラを優先する政策を取ったのです。例えば大学の定員が100人だとします。そうしますと、60人はマレー系を入れます。で、30人は中国系を入れます。残り10人はインド系その他です。もし民族別の定員枠を設けずに試験をやりますと、100の定員枠の多くが中国系とインド系に占められてしまいます。そこで、60人のマレー系の定員枠を設けること

により、マレー系つまりブミプトラが優遇されることになります。また、公務員あるいは会社でもこれは徹底しています。このブミプトラ政策は、初めは25年後の1995年までとしようとしていたんですが、できませんでした。

私がマレーシアに滞在していた2001年に、「プライムミニスター　ドクター・マハティール　イズ　クライング」と新聞に出ました。ある大学で首相が演説したのです。こういうブミプトラの政策をしてきたのに、若い君たち、なんでもっと努力して、きちんと勉強して結果を出さないのかというスピーチをしているときに、その言われているマレー系の大学生が、なんで首相が泣いているんだろうということで、ポカンとしている様子が写っているんです。

ここにも、学生の方がお見えですけど、例えばお父さん、お母さんが一生懸命お金を稼いで、皆さんを大学へやっておられる。そのときに、まあどうでもいいやで、ちゃらんぽらんで、もう赤点ギリギリだよっていう状態だったらどうでしょう。

同様に、一国の総理大臣が学生に対して、「どんなことがあっても君たちが、このマレーシアを支えていく中核だよ」と一生懸命話しているのに、フワーンってやられると、これはもう非常に切ないですね。

しかし実際には、やはり努力をしている多くの人たちがいて、このような発展を遂げました。結果としては非常に大きな力がついてきているということなんです。

６．イスラム教の起源

マレーシアはイスラム国ということで、イスラム教のお話をちょっとさせていただきます。イスラム教は、ムハンマドによって作られたとわれわれは教わっていますが、じつは、イスラム教の元になっているのはユダヤ教なんです。例えば断食をするとか、豚肉を食べないとか、うろこのある魚以外は食べないとかいうふうなことは、じつはユダヤ教が元になっています。ユダヤ教は紀元前14世紀ぐらいから始まるとも言われていますが、実際は紀元前の６世紀ぐらいに大体出来上がったんじゃないかと言われて

いる宗教です。

その時代に神がアブラハムに、今いる所、つまり古代のエジプトで囚われているユダヤの民を、私の指し示す未来に向かって新たに進みなさい、と教えます。そういう苦労をしたユダヤの民は、この世が終わるときには必ず幸せになるんだという教えです。ユダヤの律法書でもある旧約聖書にも記されています。なお、紀元前の５世紀ぐらいには仏教とかジャイナ教とか、いろんな宗教が出ています。

ムハンマドは、大体570年頃にメッカで商人の息子として生まれました。６歳ぐらいでお父さんが亡くなって、しかも12～13歳ぐらいでお母さんが亡くなって、おじさんに育てられます。

彼が40歳のときに洞窟で瞑想をしていると、まさにジブラール、キリスト教だと天使ガブリエルですが、そのジブラールが囁いたそうです。「あなたに神様からの言葉を捧げますから、私の言うとおりに捉えてください」。ムハンマドはじつは無学で文字を読めませんでした。それで神様が囁く、神様が言う言葉をそのまま唱えて、おまえの友だちや家族みんなにこれを伝えろと言われたわけです。つまり預言者になれということです。預言者というのは、漢字で「預かる言」って書きますよね。だからあなたの将来はこういうことがありますよという予言じゃなくて、神様から預かった言葉を伝えるのが、英語で言うプロフェット、預言者です。

そのときにどう言われたかというと、人間はみんな平等だ、尊い血筋だとかそういったことも何もない、あれが偉い、これが偉いということもない、みんな同じだと。

よくイスラム教はコーランが聖書だと言いますけども、旧約聖書と新約聖書とコーラン、それにプラスしてハディースという、ムハンマドが言っていたことを記録に残したものも、いわば聖書です。ムハンマドはあご鬚を生やしていたことや、奥さんは黒づくめのベールと黒い着物を着ていたということなどが、ハディースに載っています。コーランには載ってないんです。それがもととなり、今一番戒律の厳しいサウジアラビアでは、女性は全身黒づくめで、目も網目のもので覆っています。女性は、男性が旦那さんとか親でない限り、付添なしに外へ出てはいけませんという、一番

厳しい戒律があるのがサウジアラビアです。サウジアラビアのイスラムの教えでは、あの世に行くと最高の幸せな状態が待っているから、今生きているときはことごとく禁欲しようということになっています。だから音楽、お酒、理性を失うようなものは全部だめと。ですからサウジアラビアでは、メッカとかメジナとかに巡礼が来ますが、観光客は受け付けていません。

7．世界におけるイスラム教の多様性

ムハンマドが亡くなって４代目のカリフであるアリーまでは、ムハンマドの親戚でした。しかし、アリーが亡くなった後にカリフに選ばれたムアーウィヤはムハンマドの縁戚ではありません。シーア派というのは、これを認めず、アリーの子孫が正当な嫡流だと主張する派です。戒律が厳格なシーア派は、ペルシャのほうに伝わっていきます。イスラム教徒の中で、シーア派は15パーセント、スンニ派は85パーセントだそうです。

イスラム教は15世紀ぐらいに東南アジアに伝わりますが、こちらではほとんどが戒律のルーズなスンニ派です。インドネシアやマレーシア、あるいはシンガポールなどでも、例えば女性のベールにはカラーがありますし、音楽もやっていますし、それから顔も現わしています。

じつはイスラム教には大本山に相当するものがありません。例えばムハンマドもただの人間です。イエス・キリストは神の子だって、そんなことあり得ないという。神様はそんな目に見える形のものを作らないと。だから神の前で平等だし、神様は目に見えないけど、あなたの頸動脈より近い所に、つまり一人一人の皆さんのところにいるという教えです。

よく考えてみるとイエス・キリストも自身では言葉は残していないんです。『新約聖書』は書き残しですね。書き残しを直してある。仏教もそうですね。仏教のお経でも、例えば「我かくの如く聞く」と、お釈迦さんはこういうふうに言っておられたと聞いている、ということで残っている。でも悟りとは何とかっていう、お釈迦様の直接の言葉としては残しておられませんので、後からみんな解釈できる。

イスラムでは仲間を非常に大事にします。とくに男性の。それで共同体

の生活規範としてコーラン、イスラムではクルアーンと言いますが、がある。また坊さんがいないんです。イスラムは坊さんがいないから、コーランを暗唱している優秀な人に解釈を任せる。その人がたとえば次のように言う。アメリカやヨーロッパなんかがやっている近代資本主義のやり方では、みんなが幸せにならないんだと。おまえが貧乏なのも、おまえが苦しんでいるのも皆そのせいだと。コーランでは、神の前には法王も、国王も、金持ちも何もない。みんな平等なんだと。そうなっていないのは、あいつらが間違ったことをやっているからだというわけですね。

貧しくて今の生活に悩んでいる、喘いでいる人たちは救われるんです。あんたたちは悪くない、悪いのはあいつらだと。やっつけようじゃなかと。それがいろんなところに出て来る。

ところが東南アジアでは、そんな過酷なことはないんですね。マレーシアでは有史以来、飢え死にした人が１人もいないといわれています。どこに行ってもバナナが育ち、果物がなっています。極端に言うと、昼間の暑いあいだは寝てる。夜も暗くなったら寝る。そうしても、あくる日の朝目覚めたら、果物が庭先になっている。それが食べられるから、飢えることはない。お米も作っていますけれども、三期作ですから１年に３回収穫できます。だから東南アジアでは、全く穏やかに暮らしています。

８．日本企業のマレーシア進出と日本企業の貢献

次に、先ほど見たような世界であるマレーシアに、なぜ日本企業が行ったかということです。経営の本質、企業の本質っていうのは、継続するということですね。それはどうしてかというと、会社で働いている人、会社に勤めている人の家族を支える、そのために会社を続けていって、お給料も払う。つまりそれが、企業の経営で最も大事なことです。その企業が社会的な使命を持っている以上、続けていくという観点が一番大事なことなのです。

経営のトップと一般社員の違いって何かといいますと、経営のトップは少なくとも10年先もその企業がやっていけるのかと、あるいは20年後にど

うするかということを考えなければいけないということです。日本の企業のトップも1960年の後半から中期・長期計画を考えていました。いずれ日本の労働力が少なくなっていくということは、これはもう当時から分かっていたことです。

一方で、東南アジア、他のアジア・アフリカも含めて、これから10年後、20年後にはこれらの地域ではマーケットが大きくなっていくということも分かっていました。それを踏まえて進出先を考える時には、インフラがきちっとしているか、政情は安定しているか、反日的な要素がないかとかいう条件が重要となります。賄賂なども重大な問題です。

それらに関して、マレーシアで見てみると、政治の安定、労働者の英語力、インフラの充実、特に通信・インターネット、上下水道・電力・物流網アクセス、治安・安全、良好な生活環境、労働コストと供給の安定、政府の投資優遇策と積極姿勢など、多くのメリットがあげられます。

そういう点を考慮して、マレーシアということになったわけです。当初は、日本国内向けの製造工場の設立でしたが、1980年代からは、円高対策のため、欧米向けの輸出品を製造する大規模工場を設立してきました。それに伴い、裾野産業しての電子部品産業及び関連企業も集積し、今やマレーシアは電気・電子産業の一大拠点となっています。

マレーシアに進出している日本企業は、2012年時点で1,409社以上、マレーシアへの投資額は過去10年間で、毎年６千億円前後で推移してきています。外国投資では日本が一位となっています。日系企業の52％が製造業ですが、近年は非製造業では通信サービスの企業が増加しています。

マレーシアの輸出相手国は、１位はASEANですが、単独では中国が１位、日本は２位となっています。また輸入相手国でも、ASEANが１位、単独では、中国が１位、日本は２位です。

在マレーシアの日系製造企業は、製品の７割以上は輸出しています。輸出相手先は、ASEANが１位、日本は２位、３位は中国です。

以上のことからも、日本企業がマレーシア経済に大きく貢献していることがおわかりいただけると思います。

９．ASEANマーケット

マレーシアと中国との関係ということが指摘されておりますけれども、皆さんご存じのとおり中国は、年に12～13パーセントぐらいの経済成長を、ここ15年ほど続けてきております。けれども、ものすごい賄賂が横行していますね。しかしマレーシアにはそういった賄賂がないと言っていい。これは日本の企業にとりましては、非常にやりやすいということです。つまり税金のごまかしをしなくてもいいという、大きな利点があります。これもマレーシア進出の大きな理由です。

もう一つ、マレーシア進出のメリットをあげると、マレーシアを含むASEANマーケットの魅力です。ASEANは、来年2015年にマーケットとして、欧州共同体（EU）に匹敵するようなものを作るとしています。人口は６億人で、さらに増えていきます。シンガポール、台湾、韓国、日本、中国ではいま、人口低下が始まっていますが。世界のなかで一番安定的に増えているマーケットはおそらくASEANです。アフリカは政情も不安ですし、なかなか厳しいと思います。

ASEANでは、インドネシアが一番人口が多く、２億5,000万、フィリピンがこの間、人口統計で日本を抜いて１億2,000万を超えました。ベトナム9,200万、タイ6,700万です。

10. 日系企業の今後のあり方

このことから、ASEAN、マレーシアに出ている日本企業も、これから目指すところはインドネシアとインドだというふうに考えています。そのときに、じつは中国になくて日本にあるものは、日本のブランドです。これが日本国内でこそ落ちていますけども、まだまだアジアでは、あるいは中国でさえも、そのブランドが欲しくてしょうがないと考えているので、私は、言われている日本のブランド力低下について、心配をあまりしておりません。

もう一つは、今の日本の若者を皆さんどう思われるか知りませんけども、

―ご年配の諸先輩からすれば、いつだって「今の若い者は」と言いますが―、例えばブラジルのサッカーワールドカップで日本の応援団が掃除をして帰って、世界中の外電や新聞に載りました。こういうことは日本人しかできない。あるいは東北の大震災で若者のボランティアが、いま至る所から来ています。今の日本の若い人が、自分のやっていることで自分の心を清める、高めるようなことをしている限り、私は日本というのは必ず、まだまだ栄えていくんじゃないかと思っています。

司会（渡辺）：臼井先生、お話ありがとうございました。今日は「マレーシア経済と日本企業の貢献」という演題でお話をお願いしておりました。つまり、これまでのマレーシアの経済発展に対しては日本企業の貢献というものがすごく大きかったわけです。けれどもいま現在、中国が台頭してきて、そういう状況の中で日本は一体どうしたらいいのか―そういった問題にお答えいただくことが、こちらのほうからお願いした課題だったわけです。しかしながら、時間が足りなくなってしまいました。そこで、私のほうで最後に簡単なまとめをさせていただきます。

とくに、これまで日本は高度経済成長期に生産拠点をマレーシアに移して、そちらから逆に日本に輸出していたわけです。けれども、これからはそうではなく、大きなマーケットとなることが期待されるインドネシアとかインド、そういうところを開拓する余地があるということでした。中国の台頭がめざましい今後も、日系企業はまだまだいけるという、具体的にはそのようなお話だったのではないかと思います。